

奈良 ESD コンソーシアム 第4回彦根市 ESD 連続セミナー概要報告

奈良教育大学 次世代教員養成センター

准教授 中澤 静男

開催日時 11月25日(水) 18時30分～20時30分  
会場 彦根市民会館第3会議室  
参加者 学校教育課：大西康夫、吉田克、永井慎太郎、高橋乃生子  
人権教育課：山岡裕明  
保健体育課：小林豊司  
生涯学習課：川添義夫、岩堂伸行  
滋賀大研修派遣(城北小学校)：田中岳  
奈良教育大学：中澤静男 10名

今回の連続セミナーでは、ESD環境教育の実践事例の分析を行った。

テキスト：『地域を舞台にしたESD いのちをつなげる教育 2014-2015』環境省近畿地方環境事務所、  
平成26年度持続可能な地域づくりを担う人材育成事業に係るESD環境教育プログラムの  
作成・展開事業報告書

まず、全体で滋賀県での実践事例を分析し、その後、グループごとに事例を分析した。

#### 1. 全体での事例分析

##### ◆「見つけて、考えて、つなぐ」猪子山学習(東近江市立能登川南小学校)

###### (1) 本実践の Good point

- ・地域で本物を使った活動、五感をつかった学習・自然の実感
- ・環境教育に熱心な方との出会いがある。
- ・ペア学年での活動が行動化の促進につながっている。
- ・ゲストティーチャーの有効利用
- ・伐採した竹の再利用
- ・課題づくりに時間をかけている(子どもの追究したい気持ちを高めようという努力がある)
- ・地域人材、特に高校生徒の出会いがあっている。

###### (2) 本実践の改善 point

- ・川をもっと取り上げる
- ・多くの大人が関わっているが、子どもだけでもできる学習に
- ・保護者の姿が感じられない。巻き込む必要があるのでは
- ・長年の取組でマンネリ化しているのかも
- ・行動化が弱い
- ・子どもの課題意識と活動は本当につながっているのか(竹垣を作る必然性は?)
- ・文化的な学習の側面が弱い(信仰の山)
- ・行動化が学習のまとめになっている。5年生の実践としては弱い。そこから踏み込んで、自己の生活をどう変えていくかまで求めてはどうだろうか。

## 【考察】

本実践は、12年間にわたりエコ・スクールとして実践されていた学習内容をESDとして改善し、位置づけようとしているものである。本実践を次の3つのESDの視点から分析したい。一つ目に継続することの長所・短所、二つ目に環境教育とESDの差異、三つめが行動化の内容である。

一つ目の継続することの長所・短所についてである。学校のすぐ近くの里山である猪子山を学習の舞台に、そして教材として1年生から6年生まで幅広く取り組むことで、児童は学習の見通しやあこがれを抱くことができる反面、学習を組織したころの教員が異動することで形骸化することも考えられる。そのことが「子どもの課題意識と活動は本当につながっているのか」といった分析の背景であろう。しかし、プログラムの展開を見ると、7時間目までの体験学習が、すべて児童の課題作成のために充てられているとも受け取ることが可能である。ESDにおいても児童の切実感のある課題が、学習を活性化するのは同じである。ここで見出された児童の課題と次の学習のつながりを明確化していただきたいと感じる。

二つ目の環境教育とESDの差異である。ESDは持続可能な地域社会の担い手の育成を目的としている。そのため、地域環境だけでなく、人と環境とのかかわり、人と人のかかわりまで視野に入れ、自分はどうすればよいかを考える、実行する学習が求められる。本実践においては、水が湧いているところに神社が造られていること、その水が、田畑や琵琶湖の恵みをもたらすものであること、さらに神社の祭りの意義や地域住民の願いなどを追究することで実践の改善が図られると思われる。

三つ目の行動化の内容である。ESDでは行動の変革を求めているのであるが、そこには次の4つが考えられる。①ライフスタイルの変革、②地域活動への参加・参画、③持続可能な社会づくりの呼びかけ、④持続可能な社会づくりの政策提案である。本実践においては12時間目の「みんなに伝えよう」において、活動したことを発表することとしているが、里山や川、水を大切にすることを保護者や地域住民に訴える活動を位置づけることで、地域を巻き込んだ実践となっていくものと考えられる。



## 2. グループごとの事例分析

### ◆「魚庭（なにわ）の海を知って、アマモを育てよう大作戦！」（大阪市立伝法小学校）

#### （1）本実践の Good point

- ・アマモを育てるといふ実社会に活かせる活動がある
- ・大阪湾の歴史を学び、自己の行動を見直す
- ・アマモをきっかけにして海の生物の多様性を学ぶことができる

## (2) 本実践の改善 point

- ・保護者や地域の姿が見えてこない。

### ◆「歩くまち京都」学習

(京都市立梅津小学校、京都市立桃山小学校、京都教育大学附属京都小中学校)

## (1) 本実践の Good point

- ・人権・共生という視点で、自分と環境と車社会を関わらせている
- ・プログラムの構造化が明確である。学校 MM 検討会が、行政や民間、大学等とうまくつながっている
- ・学校間交流があり、多様な意見を引き出すことができる。

## (2) 本実践の改善 point

- ・行動化が弱い。観光客への呼びかけなどがあれば

### ◆「遠阪川博士になろう！」(丹波市立遠阪小学校)

## (1) 本実践の Good point

- ・年間を通した実践によって大切に思う心情を養っている

1 学期は指標生物カジカ

2 学期は季節による川の生き物の変化 (視点を変えて) : 多面的な迫りかたができています

3 学期は1年間のまとめと地域への協力要請という行動化が見られる

- ・行動化につながっている。

## (2) 本実践の改善 point

- ・息の長い単元では、まとまりごとに子どもの意欲を高める仕掛けがいるのでは。
- ・科学的探究だけでなく、川の恵みを受けて生活している人との出会いがあれば、川を大切に思う心情がより育つのではないかと。(心情的なものにふれていくことが大切)



## 3. ESD実践で大切にしたいこと

- (1) 以上の事例分析を踏まえ、参加者全員にESD実践で大切にしたいこと考察した。

### 吉田克

- ・地域のすすんでかかわる
- ・自然の中の自分を知る
- ・継続して取り組む

### 田中岳

- ・地域とのつながり
- ・行動化へのつなぎ
- ・継続できること

小林豊司

- ・環境を見つめる目
- ・人との関わり
- ・明日に向かっての行動化

山岡裕明

- ・地域とのつながり
- ・体験
- ・将来を見据えたプログラム

大西康夫

- ・地域（自分の住むふるさと）を知る
- ・人材発掘（人との出会い）
- ・より多くの人へ発信

高橋乃生子

- ・行動化
- ・地域人材の活用
- ・課題（出会わせ方・もたせ方）

永井慎太郎

- ・地域・人材を大切に
- ・本物をつかう・触れる、本物で体験する
- ・継続し、次につなげる

岩堂伸行

- ・課題の設定
- ・（地域）人材の活用
- ・学びの行動化

川添義夫

- ・見つける力
- ・巻き込む力
- ・行う力

(2) これらの意見からさらに重要と考えられる5つを抽出した

- ①地域とのつながり、②行動化、③継続、④課題、⑤体験

体験的な活動には2種類ある。一つは課題を発見させるための体験、もう一つは課題を追究させるための体験である。

地域とのつながりでは、「人」というのがキーワードになる。専門家とのつながりによって学習の広がりや深まりが期待できる。地域住民とのつながりでは、地域住民の心情を共感的に理解することで、地域社会の担い手としての当事者意識を養うことができる。

